

停年坂

正井泰夫

久しぶりにお茶の水女子大学へ教えに行くことになり、さて、地下鉄のどちらの駅を使うべきかと考えた。かつて専任として在職していた時も、しばしば迷ったテーマである。何と大げさなと思われるかも知れないが、都市の自然環境に関心をもつ私としては、決して無視すべき課題ではない。もちろん、本当は、どっちの方が歩くのが楽か、楽しいかということなのだが。

さて、茗荷谷から行ってみよう。大通りを真直ぐ行けば、附属の所の昔の立派な門から入ることになる。そこまでは緩やかな下り坂が主である。昔の地名でいうと大塚窪町に門があるのだ。正面の家政学部の建物（旧本館）までは平坦で、その後ろに文教育学部の建物や管理棟が一段と高い台地上に建っている。こう見ると、お茶大は背面が高い地形条件の所に立地しているように見える。

ところが、茗溪会館のすぐ先を左折して、筑波大附属のある方の南門（これが大学の正門？）から入ると、目の前に本部棟と文教育学部棟があり、お茶大全体は、あたかも台地面から奥へ行くほど下がって行く。つまり、大塚窪町の谷と音羽の谷を結ぶ谷地形が背後にあるのだ。グラウンドは明瞭に谷の中にあり、その先はもっと高度を下げていく。

考えてみると、東京の主要国立大学は、この後者のような地形立地をしている。東大本郷校舎がその典型で、正門から入れば、先へ行くほど高度を下げ、不忍の池のある谷地形へ移行する。お茶大の近くの旧東京教育大学も全くよく似た地形であり、キャンパスの背面が下ってる。大岡山の東京工業大学は、もっと極端に同様な地形をしている。

一般の人の大学のイメージの中には、坂を登ると大学があるというのがあるようだ。つまり、正門が坂の下か登った坂の上にあり、キャンパスには坂を登って入ることになっているのが多いので

ある。傾斜地にキャンパスを造る時に、一般に正門を低い方に置くということだ。

「登りつめ型正門」は、一般に見映えがいい。寺や神社の大半は、正門から見上げるような位置に本殿を置いている。ソウルに行くと、小高い丘の頂上は全部教会ではないかと思えるほど、教会が高い所に建っている。なのに、東京の国立大学は、どうして正反対の地形利用形態をとったのだろうか。

「登りつめ型正門」方式にも問題がある。それは疲れている時は大変なのである。私が今勤めている立正大学はこの種の地形立地をしており、緩やかな坂の後に正門があり、続いて階段になっているが、通用門の方は緩やかな坂の後に急な坂があるという形式をとっている。後者の急な坂は、僅か30mほどしかないが、今まで停年坂と呼ばれていた。この坂が登れなくなれば停年、あるいは登るのがつらければ停年が近いという意味である。多摩丘陵に移った中央大学も、同じく停年坂もっているそうである。

茗荷谷でなく護国寺駅からお茶大へ行ってみよう。まず、あの長い階段を登りつめてから外へ出て、少し平坦地を歩いてから景色のよい切り通しの緩やかな坂を登り正門へ着く。あとはエレベーターにのれば7階である。ただこれは、茗荷谷経由の場合と比べると、やや体力消耗度が高い。そんなことをいわないで、健康のためにできるだけ坂道を歩こうという声がどこからか聞こえてくる。それも本当だ。

最も楽なコースは、行きは茗荷谷経由、帰りは護国寺経由である。いや、その逆を行ったほうが健康によいぞ。この前のように、少なくとも7階から下までは階段を使おう。停年坂のないお茶大でも、無理して停年坂をつくる必要があるのだ。そんなことを毎回考えながら、久しぶりにお茶大に通った。